

2026年本土復帰54年第49回5・15沖縄平和行進

鹿児島支部青年部部長 遠藤一也

2026年5月15日(金)～18日(月)に沖縄にて沖縄平和行進全国結団式、三単産結団式、「5・15平和行進」、戦跡視察に参加し、沖縄の歴史と平和の大切さについて改めて考える機会となった。

1日目の沖縄平和行進全国結団式では、沖縄の復帰と平和運動の歴史を振り返りながら、現在の沖縄が抱える基地問題や安全保障の課題について講演が行われました。講師からは、「復帰とは本当に何だったのか」「沖縄は本当に平和になったのか」という問いかけがあり、参加者一人ひとりが深く考えさせられる内容だった。

特に印象に残ったのは、1972年5月15日の沖縄返還当時の話である。ドルから円への通貨切り替えによる事で500円札を子供が紙幣とは知らずにゴミとして捨てたなど様々な混乱や、沖縄県民が抱えていた期待と不安について具体的な体験談が語られた。また、首里城の歴史にも触れられ、戦争や火災によって幾度も失われながらも再建されてきた沖縄の歩みを知ることができた。

さらに講演では、沖縄戦の歴史や現在の基地問題についても説明があり、「戦争をしない、戦争をさせない」という思いを次世代へ引き継ぐ重要性が強調された。沖縄は日本国内でも特に多くの米軍基地を抱えており、その負担が今なお続いている現状について理解を深めることができた。

三単産団結式では、全港湾、全日建連帯、全国一般全国協の仲間が全国から集まり、団結を確認した。各地方・支部から参加者紹介が行われ、「沖縄で見て、聞いて、感じたことを地元へ持ち帰り、平和の大切さを広げていきたい」との決意が多く語られた。

最後に、「一人ひとりの行動と連帯が平和への力になる」「沖縄だけの問題ではなく、日本全体の問題として考えていこう」と呼びかけられ、参加者全員で団結ガンバローで1日目を終了しました。

2日目は、5・15沖縄平和行進に参加し、読谷村陸上競技場を出発して嘉手納基地の横を通り、北谷ドームをゴールとする約12.2キロのコースを歩いた。

当日は風が強かったが、天候にも恵まれ、多くの参加者とともに「基地のない平和な沖縄を」を訴えながら行進を行った。コースの途中では、広大な嘉手納基地を目の当たりにし、改めて沖縄に集中する米軍基地の現状や、実際に目の当たりにした騒音問題、地域住民への負担について考える機会となった。

行進では、各地域や団体から参加した人たちが横断幕やのぼり旗を掲げ、平和への思いを共有し、シュプレヒコールも様々な団体が交代で協力しあいながら行進し、建物内や歩道から手を振って応援してくれる人の姿もあり、平和運動の大切さを感じゴールを目指しました。約12.2キロの道のりは決して楽ではなかったが、参加者同士で励まし合いながら最後まで

歩き切ることができ、今回の平和行進で感じたことを今後も大切に、平和で安心して暮らせる社会の実現に向けて行動していきたい。

ゴールの北谷ドームに到着してからは「5・15 平和とくらしを守る県民大会」に参加した。会場には沖縄県内だけでなく全国各地、海外からは韓国の方達も参加しており、多くの参加者が集まり、平和への思いを共有する大きな集会となった。

大会では、主催者から「基地のない平和な沖縄を実現し、戦争につながる動きを許してはならない」との訴えがあり、参加者全員で平和への決意を確認した。また、沖縄が本土復帰して54年が経過した現在でも、米軍基地の過重な負担が続いている現状や、南西諸島で進む自衛隊配備強化への危機感が語られた。

発言の中では、戦争体験を風化させてはならないこと、沖縄戦の悲劇を二度と繰り返してはいけないことが強く訴えられた。特に、現在進められている軍備拡大や基地強化について、「平和は軍事力ではなく対話によって築くべきものだ」という言葉が印象に残った。

また、辺野古新基地建設問題や米軍関係者による事件・事故、騒音被害など、沖縄県民が抱える深刻な問題についても報告があり、「これ以上基地はいらない」という県民の声を無視した政策が続いている現状への怒りと不安が共有された。

さらに、平和行進に参加した人々からは、「実際に基地のそばを歩くことで、沖縄の現実を肌で感じた」という声もあり、基地問題が住民生活のすぐ隣に存在していることを改めて実感した。

今回の県民大会を通して、平和や人権、暮らしを守る運動は沖縄だけの課題ではなく、日本全体で考えていかなければならない問題であると強く感じた。今後も戦争につながる動きに反対し、一人ひとりが平和について考え、声を上げ続けていくことの大切さを学ぶ機会となった。

夜には沖縄支部の方達が疲れてるにもかかわらず、BBQを準備してくださり、楽しい時間を過ごさせて貰いました。

3日目は平和学習の一環として、沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、旧海軍司令部壕を視察した。

最初に訪れた沖縄県平和祈念資料館では、沖縄戦の歴史や戦争による被害、当時の県民の暮らしについて多くの資料や写真が展示されていた。戦争によって多くの命が奪われ、住民が避難生活を強いられた様子を目の当たりにし、沖縄戦の悲惨さを改めて実感した。また、子どもや高齢者を含む多くの一般住民が犠牲となった事実には知らない事だらけで驚きました。

次に訪れたひめゆり平和祈念資料館では、ひめゆり学徒隊として戦場に動員された女子学生たちの体験や証言を学んだ。学業の途中で戦場へ送られ、過酷な状況の中で看護活動を行わなければならなかった若い学生たちの苦しみや恐怖は想像を超えるものだった。展示されていた遺品や証言映像からは、「二度と戦争を繰り返してはいけない」という強い平和へ

の願いが伝わってきた。特に印象に残ったのは資料の中に娘と同じ歳の10歳の子が弟を守るため戦死したなど書かれており、涙をこらえながら見させてもらいました。

最後に旧海軍司令部壕を視察した。地下に掘られた壕の内部には、司令部として使用されていた部屋や通信室、司令官室などが残されており、戦時中の緊迫した状況を感じることができた。特に、壕内に残る手榴弾による自決の痕跡を見た際には、戦争が人々をここまで追い込んだ現実を強く感じた。ホテルに戻ってからは、三単産学習会がおこなわれた。学習会では、沖縄タイムス記者の阿部岳さんを講師に迎え、「沖縄の最前線化と私たち」をテーマに講演が行われた。

阿部さんは、自身が東京出身でありながら、沖縄の新聞記者として29年間取材を続けてきた経験を踏まえ、「沖縄の問題を沖縄の人だけの問題としてではなく、日本全体の問題として考える必要がある」と強調した。講演では、現在進行している沖縄の軍事化と、80年以上前の沖縄戦の記憶が重なり合う現状について、多くの具体例を挙げながら語られた。

特に印象的だったのは、沖縄戦体験者の証言である。沖縄戦で集団自決を経験し、生き延びた後もPTSDに苦しみ続けている現状が紹介された。米軍機の爆音によって、戦時中の記憶が呼び起こされ、現在でも心身に大きな影響を受けているという話から、「基地問題は過去の問題ではなく、今も人々を苦しめ続けている」という現実が伝えられた。

また、政府が進める「特定利用空港・港湾」政策についても説明があった。平時から自衛隊や海上保安庁が民間施設を利用できるよう整備する政策であるが、講師は「軍民共用化が進めば、有事の際には攻撃対象となる危険が高まる」と指摘した。さらに、台湾有事を想定した住民避難計画についても触れられ、宮古・八重山地域の住民避難が検討される一方で、人口130万人を超える沖縄本島の避難計画は現実的ではないと問題提起された。

講演では、1944年に米軍潜水艦によって撃沈された学童疎開船「対馬丸」の話も紹介された。軍艦と行動を共にしたことで攻撃対象となり、多くの子どもたちが命を落とした歴史から、「民間人を戦争に巻き込まない」という教訓を忘れてはならないと訴えた。

さらに、自衛隊配備の強化についても詳細な報告があった。宮古島、石垣島、与那国島など南西諸島への基地建設やミサイル配備が急速に進んでおり、「基地がある地域は攻撃目標になる」との懸念が示された。石垣島への地对艦ミサイル配備や、米軍と自衛隊の共同運用体制についても触れ、「沖縄が再び戦場となる危険性が高まっている」と警鐘を鳴らした。

また、沖縄戦の歴史認識をめぐる問題にも言及があった。一部政治家による「日本軍は住民を守った」「沖縄は米軍によって解放された」などの発言について、「歴史の改ざんにつながる危険な動きだ」と批判した。講師は、「沖縄戦の最大の教訓は軍隊は住民を守らないということだ」と繰り返し強調した。

後半では、「被害者としてだけでなく、加害者にならない視点を持つこと」の重要性が語られた。戦争は差別や排外主義によって正当化されていくこと、沖縄への基地集中もまた、日本社会全体の問題であることが指摘された。そして、「沖縄で起きていることを、自分の

地域の問題として考え、周囲の人へ伝えていってほしい」と呼びかけた。

質疑応答では、辺野古新基地建設反対運動や海上抗議行動の実態、報道のあり方について意見交換が行われた。講師は、「事故を理由に平和運動そのものを否定する動きが強まっている」と懸念を示しつつ、「事実を伝え続けることが重要だ」と語った。

今回の学習会を通じ、沖縄の現状は決して沖縄だけの問題ではなく、日本全体が向き合うべき課題であることを改めて考えさせられた。戦争体験の記憶を風化させず、平和の大切さを次の世代へ伝えていくことの重要性を強く感じる学習会となった。

夜には、三単産懇親会がおこなわれた。各地方ごとに今回の三日間を通して、様々な感想があり個人、個人見る視点や感じ方も違うので、色々な感想が聞けてとても勉強になり、楽しく過ごさせてもらいました。

四日間を通して、戦争は多くの命と平穏な暮らしを奪うものであり、決して繰り返してはならないと改めて感じた。また、戦争体験者が少なくなる中で、資料館や遺構を通じて歴史を学び、次の世代へ平和の大切さを伝えていくことの重要性を実感した。

沖縄で見て、聞いて、感じたことを忘れず、今後も平和について考え続けていきたい。